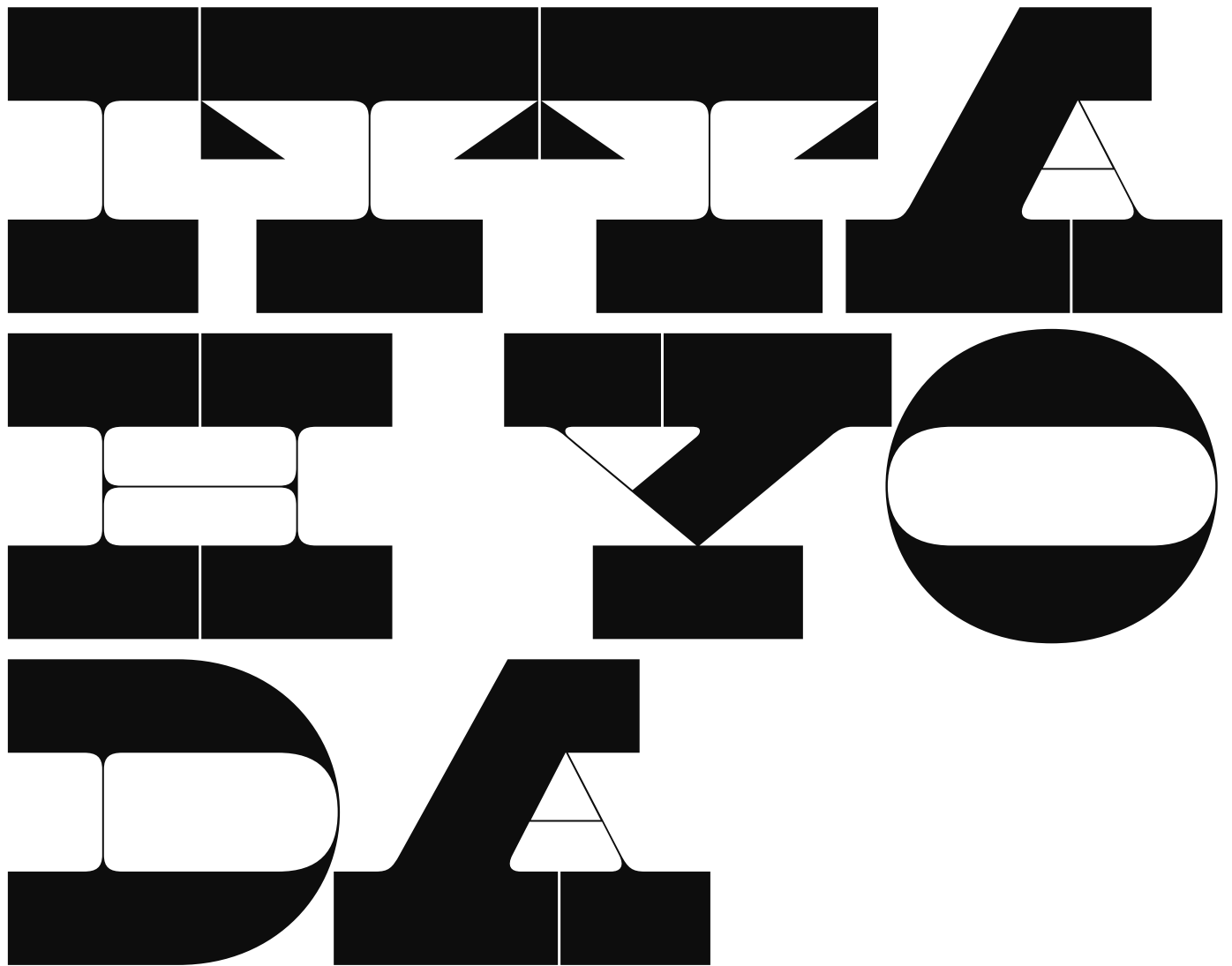


Gallery
5-1-3F, Nishi gokencho, Shinjuku-ku,
Tokyo 162-0812
Tel.03 3268 8700

Office
Roppongi Hills Residence D-1006
6-12-4, Roppongi, Minato-ku, Tokyo 106-0032
Tel. 03 5775 3839 / Fax.03 5775 3849

—
<http://sprout-curation.com>
info@sprout-curation.com



date Dec. 15 sat, 2018 – Jan. 20 sun, 2019

artist イッタ ヨダ

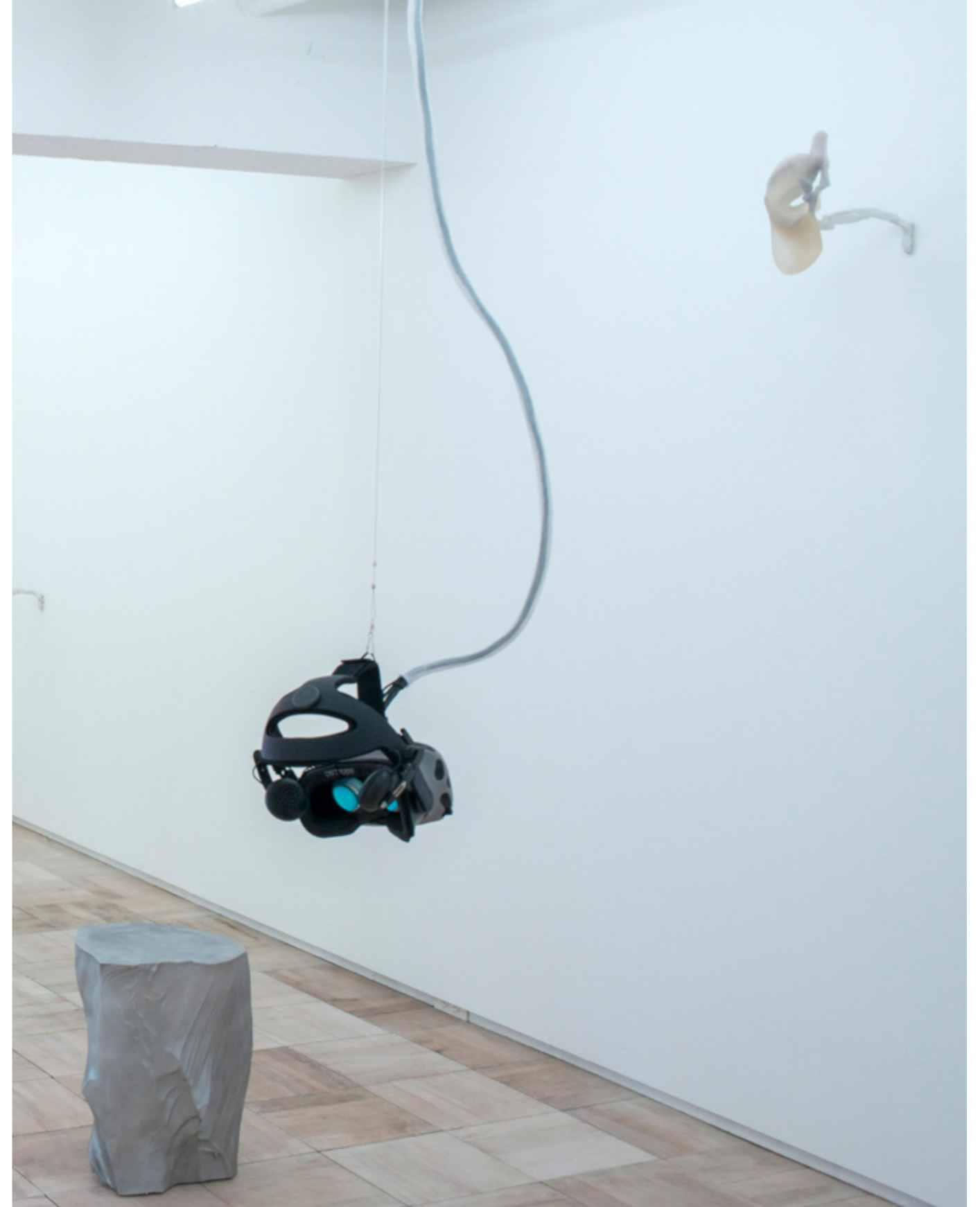
ITTAH YODA

exhibition title 降下する身体 記憶の断片

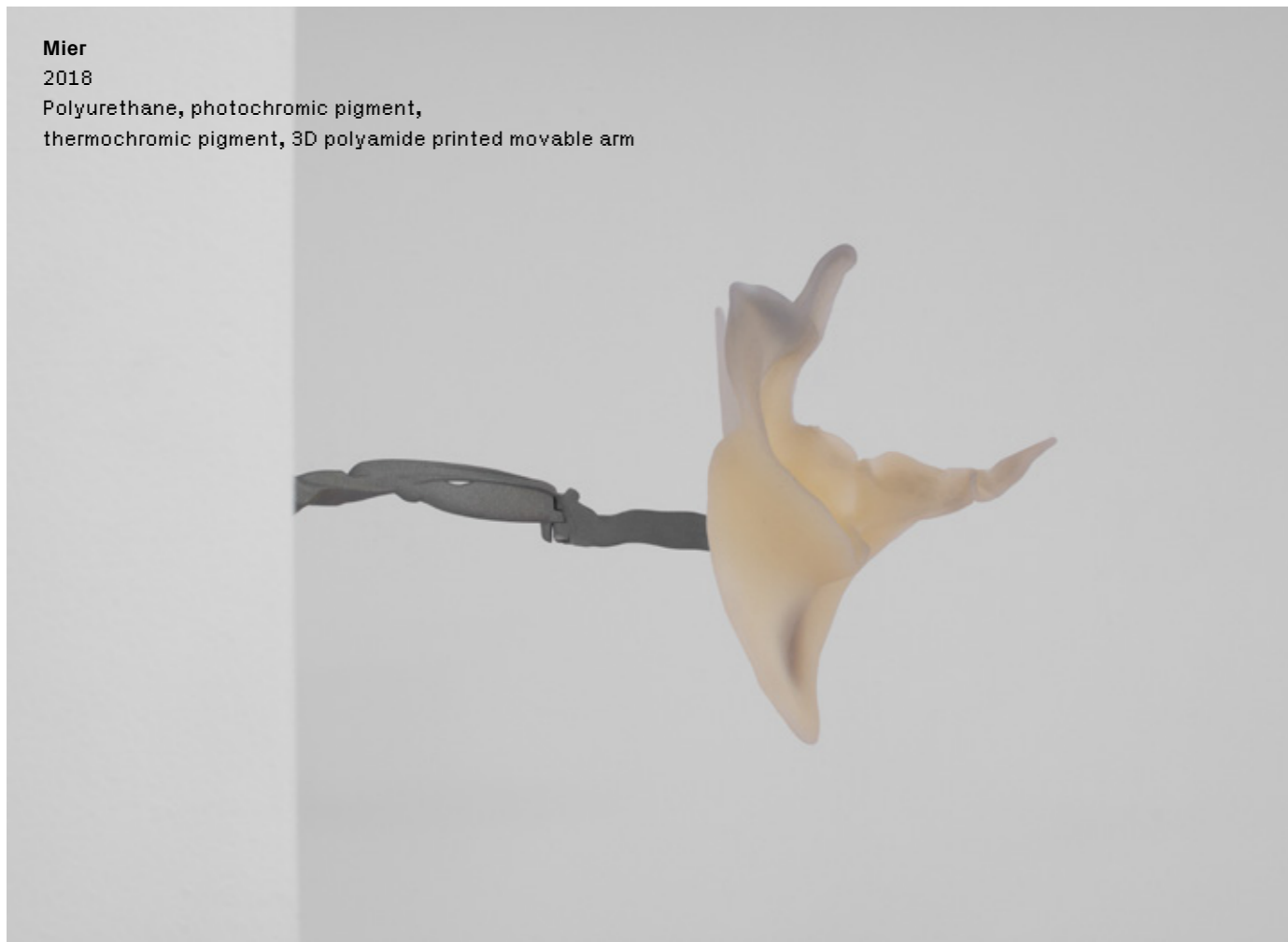
body alights – a fragmented memory

body alights - a fragmented memory

Solo Exhibition
curated by yoshikazu Shiga_Sprout curation
Tokyo, Japan
2018



Mier
2018
Polyurethane, photochromic pigment,
thermochromic pigment, 3D polyamide printed movable arm



Niko



Sara



TBA
2018
aluminium, 4casts unique textures
46 x 37 x 33cm



フランス生まれのヴァージル・イッタと日本生まれのカイ・ヨダからなるベルリン在住のアーティストデュオ、イッタ ヨダ。ふたりはそれぞれ異なる文化圏のハーフであるという出自を持ち、それゆえに未だに口語のコミュニケーションにおいてもたびたび誤解が生じると話す。彼らの協働は、コンピュータ上でそれぞれが作ったふたつの彫刻を融合させ、ひとつのデジタル彫刻を生み出したときから本格的にスタートしたそうだ。

展覧会「降下する身体 記憶の断片」に向けて彼らが制作したVR（仮想現実）には、ふたつのステージがある。ひとつはパール色の空が広がる空間として、もうひとつは体内を映す医療用の映像素材のように仕立てられている。その間を行き来することはできず、空間的な関係を持たない。そこには有機的な壁や、器官のようなものが浮かぶ。鑑賞者はその中をゆっくりと浮遊し、手元のコントローラーを使うことでオブジェクトに触れることができる。遠近感をうまく掴むことのできない世界では、それが大きいのか、近くにあるのかの感覚は不確かなものとなる。

体液の中に浮かぶ器官、環境光を反射する有機的な壁。こうした感覚は展示室においても実現されている。VR は解像度の荒いLED ディスプレイで中継され、アルミニウムの椅子は蛍光灯の有色光を反射する。空中をたゆたうように造形された有機的な彫刻が、骨のようなアームによって壁や天井から吊られている。医療用のシリコンによって成形されたそれらの彫刻は、気温と紫外線に反応し色——光波が表面に反射する、その在りようを変える。こうした色彩が展示室を出た後に見る空のグラデーションに似ていることは決して偶然ではない。

VR 空間、展示室。そしてそれらを作り出すイッタ ヨダの分娩室

= 制作論に足を踏みいれよう。反復してあらわれる有機的な形態は、全てふたりの協働の始点となったデジタル彫刻に操作を加えたものだ。例えばVR 空間において、それは風景や環境の大きさに拡大されている。アルミニウムの椅子は、この形態と型と原型の関係を持っている。またシリコン彫刻の造形はデジタル彫刻を展示するために作られたホルダーであり、デザイナーが制作したアームによって、本体のない状態で展示されている。ひとつの彫刻は、拡大、型取り、複製、機能的な解釈を通して、生物が子孫を残すように、個という輪郭を超えて展開していく。

こうした方法は、地理的、社会的、民族的に異なる文化が急激に混じり合う現代の多文化社会を背景に、自分という個体を超えて彫刻を制作するために生み出されたものだという。そして彼らが現代的なメディアやテクノロジーを使いながらも、自分の実存を内的に掘り下げ、精神性をまとった彫刻を作り上げるといふ表現主義的な側面を持つことを強調しよう^{*1}。人間の内面の表出、それを他者と共有するという彼らの美学は、内側にあるものがむき出しになるという空間的な操作、それを作り出す制作論においても見ることができる。

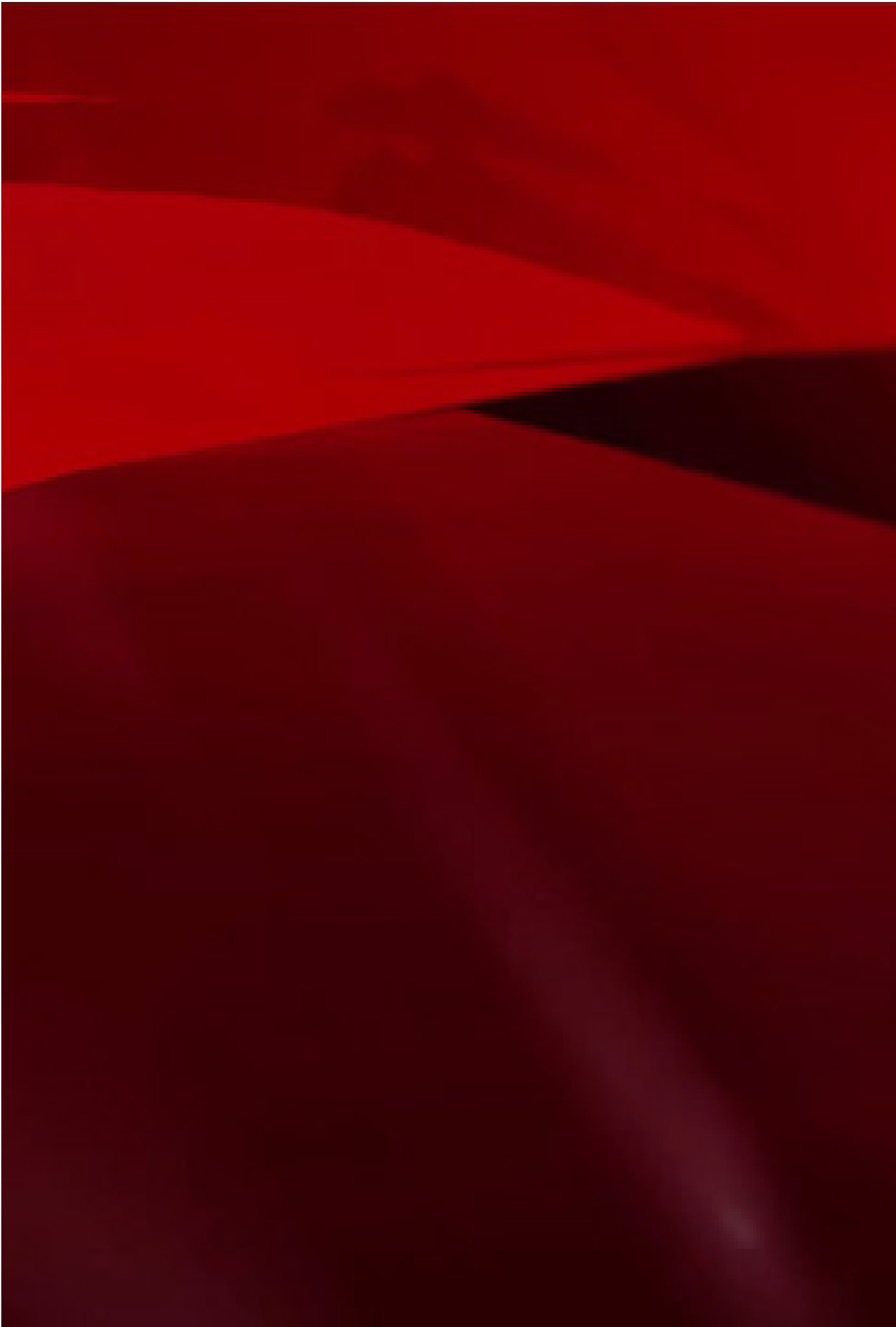
しかしここに一抹の不安を書きつけておきたい。異なる背景を持つ異なるふたりの内的な感覚から作られた彫刻を、演算によってひとつに融合するという強引な操作が必要とされる現実こそが、他者理解が決定的に不可能な現代社会の臨界点をアイロニカルに示しているといえないだろうか。彼らの方法が多文化社会が抱える様々な軋轢に対する本質的な救済ではないことに彼ら自身も気づいているだろう^{*2}。だからこそこの出口のないうっすらとした不安は、彼らの造形にいつそうメランコリックな美しさを与えている。

*1 | 彼らは彫刻家オーギュスト・ロダンやその弟子でもあったコンスタンティン・ブランクーシの作品を「内的な彫刻」と呼び、自身の実践をその延長線上に位置付けている。ここで彫刻と台の関係を扱ったブランクーシの名前を挙げていることは、デジタル彫刻のホルダーとしての有機的な形態をアームによって固定し展示するという異様な主従（逆転）関係について考える上でも参照項になるだろう。

*2 | ヨダは社会的なアイデンティティーについて尋ねた筆者のメールに対して、以下のように返信した。「ロンドンに何年も住んでいても、そこまで意識することはなかったように思います。あまり意識し始めると、自分の個としての生存というか、アイデンティティーの崩壊とまではいかなくても、危機にさらされる危険性があるからなのかもしれません。例えば、自分のアイデンティティーの両義性に対応するために、精

神分析療法セラピーに20年通ったという有名なアーティストの話も聞いたことがあります。つまり専門家に頼らずに、自分だけの力でアイデンティの両義性や矛盾に対応するのは、かなりの致命傷を伴うというか、ひとりの人間にとっては難しいところがあるのかもしれません。」





The Internal Sculptures of Ittah Yoda – Virtual Reality, Sharing, and Anxiety

text by Riku IIOKA

Ittah Yoda is a Berlin-based artist duo by French-born Virgile Ittah, and Japan-born Kai Yoda. Being of different mixed backgrounds, the duo have mentioned of often encountering misunderstandings among one another even within everyday spoken communication. Their collaborative practice officially began since the production of their first digital sculpture together, which had been realized through combining two sculptures that each had respectively created on their computers.

The VR (Virtual Reality) works produced for their exhibition, *body alights – a fragmented memory*, consists of two stages. One is a space in which a pearl-colored sky extends above, while the other is conceived in a manner akin to footage capturing the insides of the human body. There is no spatial relationship, as it is not possible to move back and forth between the two works. Organic walls and objects reminiscent of internal organs can be seen drifting within the spaces. The viewers slowly float through these environments, while being invited to touch the various objects using a handheld controller. In a world where it is not quite possible to have a full grasp of perspective, sensations of size, depth, and distance become uncertain.

Internal organs float amidst bodily fluids, and organic walls reflect ambient light. Such sensations are also manifest within the exhibition room. The VR is relayed in pixelated resolution on LED displays, while the aluminum chairs reflect the colored lights of the fluorescent lamps. Organic sculptures, devised as if hovering in mid air, are suspended from the walls and ceiling by arms that look like bones. These sculptures molded from medical silicone react to the temperature and ultraviolet rays, as a result changing the way in which the colors (light waves) reflect off their surface. It is by no means a coincidence that these colors resemble the gradations in the sky that viewers encounter after exiting the exhibition room.

Let us discuss in depth the VR space and exhibition room, as well as the very delivery room = Ittah Yoda's philosophy for production that is the basis for their creation. The organic forms that repeatedly emerge have all been conceived through further manipulating the digital sculptures that marked the start of their collaboration. In the VR spaces for example, such are expanded to the scale of landscapes and environments. The aluminum chairs serve to demonstrate this relationship between form, shape, and prototype. Furthermore, the forms of these silicone sculptures have been conceived as vessels in which to present the digital sculptures, and while absent of their main body, are respectively installed on specially designed arms. Likewise to living organisms that bear offspring to preserve their kind, a single sculpture develops beyond the boundaries of itself through means of expansion, shaping, duplication, and functional interpretation.

The artists describe these methods as being devised in order to produce sculptures that transcend the individual within the context of a multicultural contemporary society where geographical, social, and ethnically different cultures rapidly coalesce with one another. It is important to emphasize that despite appropriating contemporary media and technology, Ittah Yoda's practice harbors an expressionist aspect of introspectively examining their own existence to produce sculptures that permeate with an air of spirituality*1. This aesthetic of unveiling and sharing the inner nature of human beings with others can also be observed in their spatial manipulations that attempt to expose what is inside, as well as the philosophies for production from which they are derived.

That being said however, one cannot help but mention that there is a slight sense of unease here. Could we indeed not consider this very reality that warrants the coercive manipulation of fusing together sculptures, conceived as a result of the inner sensitivities of two different individuals of different backgrounds, as ironically representing the critical point of contemporary society where it is decisively impossible to understand others? One anticipates the artists themselves are also aware that their methods of practice do not provide an essential relief against the various conflicts of multicultural society*2. It is for this reason that this hint of anxiety with seemingly no end instills a further air of melancholic beauty to the forms that they create.

(translation by Kei Bengert)

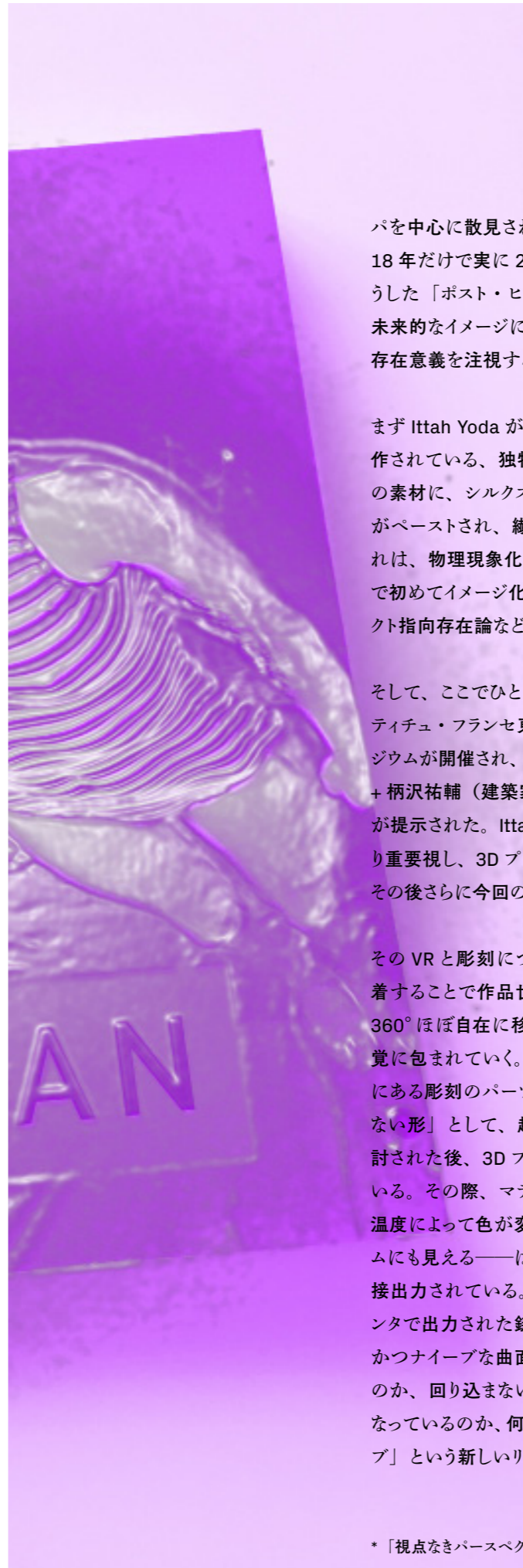
Yesterday と Now の中間的な Yesternow という造語があるらしい。直訳すると「過去現在」。筆者がこのことを知るきっかけとなった音楽雑誌 ele-king 22 号は、ジャック・デリダの『マルクスの亡霊たち』を引用しながら、「存在は単なる現在によってできているのではなく、それは過去の理想の消滅が幽霊として出現していることを指している」とし、さらにこう続ける。「現在生まれてくる音が、過去に描かれた未来の消失に取り憑かれている（…）新たな記憶を創出することが不可能になり、過去からも未来からも、そして現在からも分裂した現在がここに表出している」。この記事は、たんに音楽の現在形を描写したにとどまらず、近年のアートにおいて「ゾンビ・フォーリズム」が量産される背景を端的に批判しているとも解釈できる。

2010 年前後から、グローバルなアートマーケットで「具体」「モノ派」など日本の戦後美術の評価が急速に高まるにつれ、現在のアートは、こうした先達の偉業といかに接続するか、その探求に余念がない。しかしこれは、「過去が照射する現在」に囚われている点において Yesternow であり「分裂した現在」を生きているということにはならないか。「具体」「モノ派」に限らず、近代以降の前衛が脱構築しようとした人間の知覚と世界とのあり方が、その後大きく変わっていることを、私たちは十分に理解しているはずではないのか。「具体／モノ派」の時代の未来像が、現在のような高度なデジタル社会であったとは到底考えられないのだが…。

ウォルフガング・ティルマンスは、現代の知覚体験が断片化されたレイヤーで構成されていることを示唆し、また SNS 上のポートレートをキャプチャーしたりチャード・プリンスの New portrait シリーズは、ポスト・インターネット時代のエポックとしても記憶に新しい。そしてこれらが示すのは、デジタル・デバイス上で複数のタブを同時に開き、ネット空間やローカルの情報をリゾーム的に繋ぎ合わせることで世界を認識するという、この時代ならではのリアルだ。

もっともポスト・インターネット的なフェーズは、そのテーマの対象を少しずつ変化させつつある。それは「ポスト・ヒューマン 2.0」とでも呼ぶべきものかもしれないが、1992 年にニューヨークの Jeffery Deitch で開催された「ポスト・ヒューマン」の、時を隔てた続編かといえばそうではない。むしろ喫緊の未来に備えるアティチュードがその特徴かもしれない。例えば、早ければ数年以内に実装される 5G（第 5 世代移動通信システム）によって、IoT は劇的に進化することは間違いなく、我々の生活は、ネットワークから逃れることすら難しくなるだろう。もっと大局的に見ても、地球環境や政治・経済・金融をめぐる近年の激動は、シンギュラリティや宇宙を巡る「新しい大航海時代」など、人類史的なターニングポイントのほんの序章に過ぎず、現在はその前夜だという認識が必要になってくる。

このように「過去が照射する現在」に囚われることなく、「未来から照射する現在」を模索する「ポスト・ヒューマン 2.0」的なアーティストやキュレーションが、最近ヨーロ



パを中心に散見される。Ittah Yoda はそのアイコンックなアーティストで、2016 ～ 18 年だけで実に 20 近いグループ展に招聘されている。しかし、Ittah Yoda がこうした「ポスト・ヒューマン 2.0」のフェーズにフィットする要因は、たんにその近未来的なイメージにとどまらない。深く内在しているコンセプトや、ユニットとしての存在意義を注視するべきだろう。

まず Ittah Yoda がユニットとして本格的に活動を始めた 2015 年から継続的に制作されている、独特なアウラを放つペインティング。スポーツメッシュなどの半透明の素材に、シルクスクリーンやシリコン、さらに紫外線に反応して変色するインクなどがペーストされ、繊細なマチエールを伴った多層的なイメージを形成している。これは、物理現象化する未然のエネルギーが、現実というスクリーンにぶつかることで初めてイメージ化（物質化）するという、量子物理学と思弁的実在論／オブジェクト指向存在論などの共通の関心事をモデル化したようで興味深い。

そして、ここでひとつのシンクロシティを挙げておきたい。2017 年 4 月、アンステイチュ・フランセ東京で、思弁的実在論／オブジェクト指向存在論をめぐるシンポジウムが開催され、パネラーのエリー・デューリング（哲学者）+ 清水高志（哲学者）+ 柄沢祐輔（建築家）による鼎談の中「視点なきパースペクティブ*」というワードが提示された。Ittah Yoda が作品において「固定された単一な視点の外部」をより重要視し、3D プリンタの彫刻制作をを本格化させるのはちょうどその時期であり、その後さらに今回の個展で初めて披露する VR 作品へと発展していくことになる。

その VR と彫刻について詳しく触れておこう。まず鑑賞者は、VR ゴーグルを装着することで作品世界に侵入し、ゲームのコントローラを使いヴァーチャル空間を 360° ほぼ自在に移動する。やがて身体感覚が蒸発し、意識だけが浮遊する感覚に包まれていく。そしてその中で遭遇するポリゴンの断片は、実際の展示空間にある彫刻のパーツだったりする。この奇妙な花のような彫刻は、「自然に存在しない形」として、超・個的主体である Ittah Yoda の「内語」によって慎重に検討された後、3D プリンタで出力した鋳型にシリコンや樹脂をキャストして作られている。その際、マテリアルに感温性の色素が埋め込まれ、「奇妙な花」は環境の温度によって色が変化する。茎のようなパーツ——宇宙空間で作業するロボットアームにも見える——は、3D プリンタでポリアミドという非常に硬い合成繊維として直接出力されている。VR を体験するためのスツール型の彫刻作品もまた、3D プリンタで出力された鋳型にアルミニウムをキャストした作品だ。いずれの彫刻も複雑かつナイーブな曲面が美しい。そして見えている向こう側の部分がどうなっているのか、回り込まない限り全く予想がつかない。現実の彫刻と VR 空間が入れ子になっているのか、何が現実なのか、思考を巡らせるうちに「視点なきパースペクティブ」という新しいリアルが鑑賞者の内に立ち上がってくる。

* 「視点なきパースペクティブ」については、同会場での同時通訳を筆者がメモとして記述。

Post Human 2.0

text by Yoshikazu SHIGA_Sprout Curation

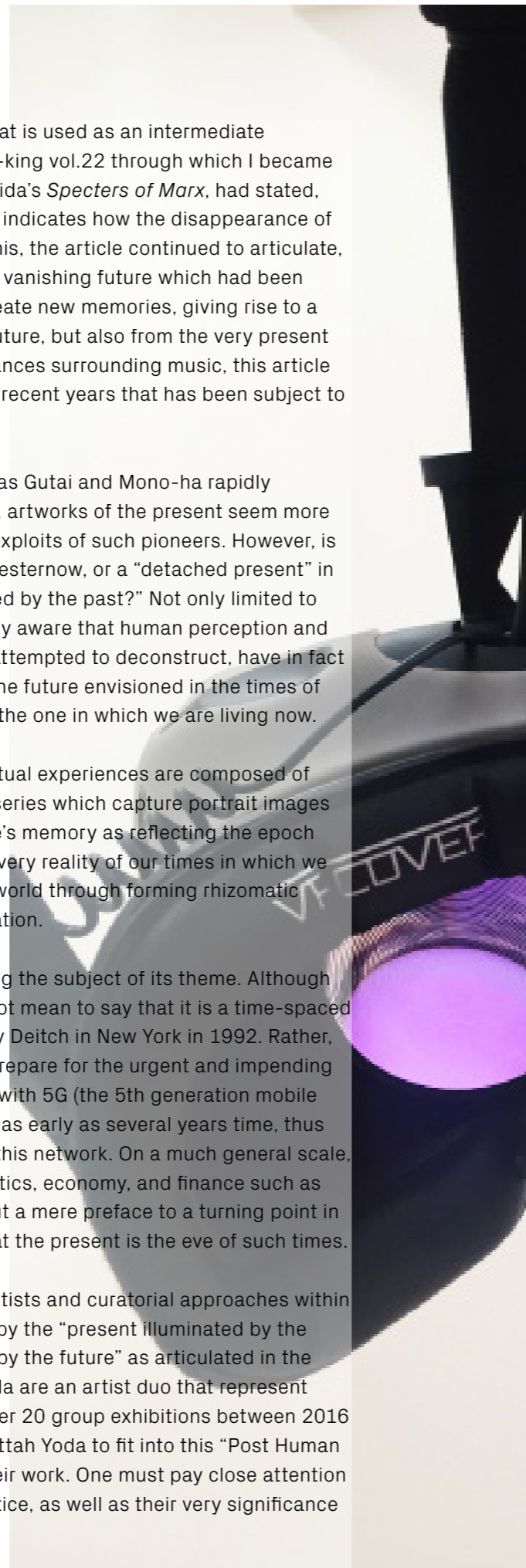
There is apparently a neologism known as “Yesternow” that is used as an intermediate between “Yesterday” and “Now.” The music magazine *ele-king* vol.22 through which I became acquainted with this term, while referencing Jacques Derrida’s *Specters of Marx*, had stated, “Presence is not merely made by the present, but instead indicates how the disappearance of past ideals manifest in the form of specters.” Further to this, the article continued to articulate, “Music that is currently being produced is haunted by the vanishing future which had been envisioned in the past (...) it has become impossible to create new memories, giving rise to a present that is detached not only from the past and the future, but also from the very present itself.” More than simply describing the present circumstances surrounding music, this article could also be interpreted as a direct critique on the art of recent years that has been subject to mass-produced “Zombie Formalism.”

As the evaluation towards Postwar Japanese art such as Gutai and Mono-ha rapidly increased within the global art market since around 2010, artworks of the present seem more so intent in exploring ways to form connections with the exploits of such pioneers. However, is this not testimony to the fact we are indeed living in the Yesternow, or a “detached present” in the sense of being prisoner to a “present that is illuminated by the past?” Not only limited to the contexts of “Gutai” and “Mono-ha,” but are we not fully aware that human perception and the ways of the world that postmodern avant-garde had attempted to deconstruct, have in fact significantly changed since then? One cannot think that the future envisioned in the times of “Gutai/Mono-ha” was an advanced digital society as like the one in which we are living now.

Wolfgang Tillmans suggest how contemporary perceptual experiences are composed of fragmented layers, while Richard Prince’s “New Portrait” series which capture portrait images posted on social networking platforms is also fresh in one’s memory as reflecting the epoch of the post internet era. What these works indicate is the very reality of our times in which we open multiple tabs on our digital devices, perceiving the world through forming rhizomatic connections between the internet realm and local information.

Certainly, this post internet phase is gradually changing the subject of its theme. Although this could be referred to as “Post Human 2.0,” one does not mean to say that it is a time-spaced sequel to the Post Human exhibitions organized by Jeffrey Deitch in New York in 1992. Rather, it is perhaps characterized by an attitude that serves to prepare for the urgent and impending future. For example, IoT will no doubt evolve dramatically with 5G (the 5th generation mobile communication system) that is said to be implemented in as early as several years time, thus making it even more difficult for our lives to escape from this network. On a much general scale, recent upheavals concerning the global environment, politics, economy, and finance such as that of singularity and “the new age of space travel,” is but a mere preface to a turning point in human history. It is thus necessary for us to recognize that the present is the eve of such times.

In this respect, recent years has seen an increase in artists and curatorial approaches within Europe and throughout the world, that are not caught up by the “present illuminated by the past” but instead seeks to explore a “present illuminated by the future” as articulated in the philosophies and concepts of “Post Human 2.0.” Ittah Yoda are an artist duo that represent such tendencies, who have been invited to take part in over 20 group exhibitions between 2016 and 2018 alone. That being said, the factor that enables Ittah Yoda to fit into this “Post Human 2.0” phase is not limited to the neo-futuristic image of their work. One must pay close attention to the concepts that are deeply inherent within their practice, as well as their very significance as an artist duo.



First of all, let us look at the paintings of Ittah Yoda, each permeating with a unique aura, which they have continued to produce since 2015 when commencing their practice as a duo. Things including silkscreen, silicone, and ink that changes color in response to ultraviolet rays are pasted onto translucent materials such as sports mesh, giving form to various multilayered images born forth through these delicate matière. It is interesting in the sense that they appear to model common interests like quantum physics in which unexpected energy that is yet to manifest as physical phenomena is materialized as imagery through colliding with the screen of reality, as well as the very notions of Speculative Realism / Object-Oriented Ontology.

At this point I would like to mention a particular case of synchronicity. In April 2017, a symposium on the topic of Speculative Realism / Object-Oriented Ontology was held at the Institut français du Japon, where the phrase “The Objective Reality of Perspectives*” was mentioned amidst discussions between the panelists Elie During (philosopher) + Takashi Shimizu (philosopher) + Yuusuke Karasawa (architect). It was around this time that Ittah Yoda had begun to engage in the production of sculptures using 3D printers, while placing further importance on “realms that exist beyond and outside a singular, fixed perspective.” Such practice had thereafter evolved into the VR works that are presented for the first time in this exhibition.

One will take the opportunity to elaborate on the VR and sculpture works exhibited on this occasion. First of all, viewers venture into the world of the work by wearing a pair of VR goggles, freely navigating near 360-degrees through the virtual space through the use of a handheld controller. Eventually, all bodily sensations evaporate, leaving people to embrace the feeling of only their consciousness drifting. The fragments of the polygons encountered within the VR at times resemble parts of the sculptures that are actually installed within the exhibition space. These peculiar flower-like sculptures that depict “forms nonexistent within nature,” after being meticulously scrutinized through the “inner language” of Ittah Yoda as a hyper-individual entity, are made through casting silicone and resin from molds created by a 3D printer. Furthermore, a thermo-sensitive pigment is embedded into the material, enabling the colors of these “peculiar flowers” to change in response to the temperature of the surrounding environment. Stem-like parts –seemingly reminiscent of robotic arms operating in outer space- have been directly 3D printed in a highly solid synthetic fiber known as polyamide. The stool-shaped sculptures which viewers are invited to sit on while experiencing the VR works have also been made through casting 3D printed molds in aluminum. All such sculptures are beautiful in the complicated yet naïve intricacies of their curved surfaces. Unless one walks around them, one cannot speculate what they look like on the other side simply from what is presently visible before one’s eyes. In contemplating whether the actual sculptures and the VR spaces are intertwined and nested within each other, as well as questioning what is real and what is not, a new sense of reality, that is, “The Objective Reality of Perspectives” comes to manifest within the viewer.

*The phrase “The Objective Reality of Perspectives” is in reference to my notes taken during the symposium based on the simultaneous interpretation provided on site.

(translation by Kei Bengler)

Profile of the artist

ヴァージル・イッタとカイ・ヨダは、ロンドンの Royal College of Art でそれぞれ彫刻と写真を学び、2015年にアーティスト・デュオ Ittah Yoda を結成。3DプリンターやVRなどの先進技術を取り入れる事で、絵画や彫刻の持つ既存の概念を解体し、多様なメディア、マテリアルをもって再構築する事を実験的に続けている。近年では、主にヨーロッパ各地で多くの作品発表の機会を得ている。

ヴァージル・イッタ | Virgile Ittah

1981 パリ生まれ ベルリン / プロヴァンス在住

2010 パリ SPEOS 写真学部卒業

2013 ロイヤル カレッジ オブ アート (ロンドン) 彫刻科修了

カイ・ヨダ | Kai Yoda

1982 東京都生まれ ベルリン / プロヴァンス在住

2006 慶応義塾環境情報学部卒業

2011 ロイヤル カレッジ オブ アート (ロンドン) 写真映像科修了

Education

2013 MFA in Sculpture, Royal College of Art, London, GB (V)

2011 MFA in Photography, Royal College of Art, London, GB (K)

2006 BA in Environmental Information, KEIO University, Tokyo, JP (K)

Solo Exhibitions

2018 **body alights - a fragmented memory**, Sprout Curation, Tokyo, JP

2016 **I think mango you say salmon**, Annka Kultys Gallery, London, GB

2015 **Walking on the beach imitating sand**, Hus Gallery, London, GB / as Virgile Ittah + Kai Yoda

2014 **HERE'S LOOKING AT YOU**, Lychee One Gallery, London, GB / as Virgile Ittah + Kai Yoda

Group Exhibitions

2019 **COLLAPSE ON HOLD**, Mocvara Gallery, Zagreb, CRO

2018 **Augmented Sunrise Beneath The Skin**, Gr_und, Berlin, DE

Dead Air, LARP, Omsk Social Club, Gossamer Fog, London, GB

Dead Air, LARP, Omsk Social Club, Raum Station, Zurich, CH

Dead Air, LARP, Omsk Social Club, Gr_und, Berlin, DE

SUV, BSMNT + PANE, Werkschauhalle, Spinnerei Leipzig, DE

European, Foreign & Domestic, Slate Projects, Averard Hotel, London, GB

Video Tutorials, PANE project + Media Naranja, Plage des Goudes, Marseille + online @AQNB, FR.IT

Haggerston Park, ANDOR Gallery, London, GB

2017 **Delta**, ICPE, Bucharest, RO

Risky Attachments, FOOTHOLD, Like a little disaster, Polignano a Mare, IT

Post - Living Room, Shibuya Hikarie 8/ Cube 1.2.3, Sprout Curation, Tokyo, JP

SQUISHY: eels swim in snakey, Julius, Berlin, DE

Lightness, White Rainbow Gallery, London, GB

Still Fuzz, Windows16 Gallery, online

LCN Showcase, SPACE, London, GB

2016 **Off to Mahogany**, Rye Lane, London, GB

Suggest The Shape of The Wind, Nam Project, Milan, IT

Aujourd'hui je dis oui, Galeria Boavista, Lisbon, PT

2015 **What is a bird? We simply don't know**, Nicodim Gallery, Bucharest, RO/ as Virgile Ittah + Kai Yoda

Future can wait, B1 Victoria House, London, GB / as Virgile Ittah + Kai Yoda

2014 **In The Flesh**, OBS Gallery, Kent, GB / as Virgile Ittah + Kai Yoda

2013 **The Open West**, Cheltenham Museum, Cheltenham, GB / as Virgile Ittah + Kai Yoda

2012 **BYOB, Moving Image Festival**, London, GB / as Virgile Ittah + Kai Yoda

Text

2017 *Organising Life without a World* by Penny Rafferty

2014 *HERE'S LOOKING AT YOU* by Alexander Garcia Düttmann

Press

2018 **Elephant Magazine** Eight Noteworthy Berlin Exhibitions by Alice Bucknell

Garage I'd invite You to this Rave, But You'll Need to Mine Crypto and Find a New Identity First

by Emily Mcdermott

Berlin Art LInk Identity and Belonging in an Increasingly Globalized World by Samuel Staples

AQNB Channeling social media + self-promotion in the #videotutorials

2017 **Sleek Magazine** Berlin's 13 Best Art Shows of 2017 by Sophia Lawler-Dormer

Schön! Magazine interview I ittah yoda by Daisy Schofield

2016 **Art Asia Pacific** *I think mango you say salmon* by Ambika Rajgopal

Mousse Magazine *I think mango you say salmon*

Tique Art Paper Six Questions: Ittah Yoda by Charlotte Boeyden

1 Grannary Ittah Yoda and the Ying and Yang of the artist collaboration, by Aric Miller

Publications

2018 **Catalogue** *Augmented Sunrise Beneath The Skin*, Gr_und, Berlin, DE

Players Handbook *Dead Air, LARP*, Omsk Social Club Berlin, London, Zurich, DE.GB.CH

Funzine *Risky Attachments, FOOTHOLD*, LALD, Polignano a Mare, IT

Residencies/ Grants/ Talks

2018 Talk at Nagoya Art Universtiy, JP 18.Dec.2018

2018 VR Arts Residency, Format C + SwS, Potsdana, CRO

2017 LCN, SPACE, London, GB

2012 1 Year Program of Overseas Study for Upcoming Artists, Agency of Cultural Affairs, JP (K)